

Eureka III

六年制通信 No. 20 平成27年10月23(金)号

幼児性を断ち切れ

先日の朝礼でも言いましたが、ノーベル賞に輝いた大村博士は幼いころから祖母に「世のため人のためになるようなことをしなさい」と言われ続けたそうです。それがいつしかご自身の生きる指針になったわけですね。これは要するに、迷った時は「私」を捨てて「公」に尽くす道を選べ、ということでしょう。大変立派な考え方だと思います。しかし、この倫理観は、大村博士に特徴的なものではなく、昔は世の中に普遍的にあったものだったと思います。「世のため人のため」というのは「人に迷惑をかけない」と同じくらい、当たり前のこととして認識されていたように思います。個人の幸福を追求するようになったのは、実は最近の風潮なのでしょう。教育の現場でもこの考え方が普通になってきています。「個」が強調されるようになったわけです。「個」というのは「私」ですよ。本来、教育には「公」の精神を育むという使命があったはずですが、最近では何となく「公」は優先順位を下げてきているように思います。それで、次第に生徒諸君を鍛えにくくなってきているように思うのですが、これでいいのかなあ。

さて、書物を通してでも恩師と呼べる人がいるというのは幸せなことで、先日もその人の本に、こんなことが書かれていました。「学校は単に実用を本体とするのではない。修養と鍛錬を目的とするのである。学問は知識だけではない。一方において知識を養うとともに、これによって心力を鍛錬し、努力の習慣を養い、人物を練成する。学校は鍛錬の道場である」と。こういうのを読むといつも叱られているように感じるので、ほっとけば怠けてしまう自分には有難い恩師です。やっぱり、自信を持って生徒を鍛えなきゃいかんのだなあ。

努力の習慣を養うのはつまり勉強の習慣の涵養ですから、それは日々の予習復習などによって身につけていくことです。君たちならできて当たり前のことでしょう。しかし心力の鍛錬とか人物を練成するとはどういうことでしょうか。考えてみると、これもよく君たちに言ってきたことですが、早く大人になれということではないかと思います。大人になれとは子供に対して言う言葉ですね。むろん中高の時期に肉体的には大人と変わらない成長をしていきますから、大人か子供かは精神的なところを指して言うわけです。君たちの子供の部分、その精神が及ぼす言動が私たち大人には透けて見えます。子供というより幼児性と言ったほうがいいかもしれません。では幼児性とは何かを考えてみましょう。自分の中にある子供の特徴を排していく必要があるからです。

幼児性とは、これまたある人が言うには「自己が希薄になり、人の思惑を恐れ、人と同じでなければ不安にとりつかれるくせに人より目立ちたいという幼い自己矛盾にも気づかず、暑さ寒さ不便全般に耐えられず、自分の利益は考えても人のために尽くすことには全く反応せず、他者の存在さえあまり意識しない人」だそうです。どうですか。君たちはこの定義をどう思いますか。なるほどと思うでしょうか。私は、その通りだと思います。幼児性の定義として辞書に載せられそうな文章ですが、あえてこれにいくつかつけ加えたいと思います。まず、他者の存在を意識しないのもそうでしょうが自分以外にほとんど関心を寄せない、また周囲から自分に注がれている愛情に気づかない、そういう特徴があるように思います。さらに、「ものごとの取り返しのつかなさ」という感覚に劣っている、幼児性にはこの特徴が色濃くあるように思います。SNSなどの投稿被害などはその典型で、大人は自分の行為が取り返しのつかないことになるという感覚を備えています。

また、ほんの小さいころは誰しも、空間的にも時間的にも自分の身近なところしか認識できないのですが、年齢を重ね、勉強して大人になるにつれて空間を広く把握するようになり、時間軸の中に今の自分を置いて考えることができるようになります。中高の6年間で、君たちは大人の感覚を持ち、大人の振る舞いができるように成長してほしいと思います。私たちが君たちに求めるものは日々高くなっていきます。どうか、心の中の幼児性を排して、志を高く持って勉強して下さい。

ブリテン島の古名について

イギリスは正式名称を「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国」と言います。英語では **The United Kingdom (the U.K.)** ですね。イングランドというのはグレートブリテン島からスコットランドとウェールズを除いた地域を指します。ややこしいですね。大陸からドーヴァー海峡を渡るとイギリス南部の、つまりブリテン島の海岸が見えますが、この島の古名を **Albion** と言います。島の南部海岸は白亜質の絶壁で、白く見えたのですね。それで白い島という意味の **Albion** と名づけられたのです。

さて、「白」を意味する言葉で有名なのはアルバム **album** ですが、**alp-**とか**alb-**には「白い」意味があります。アルプスもそうですね。難しいですが、**albumen** は「卵白」、**albumin** はたんぱく質の一種を指します。要するに白いわけです。「白い」を表す語でフランス語から来ているものには **blank-** があります。モンブラン **Mont Blanc** のモンは山、ブランが白です。カサブランカ **Casablanca** の **casa** は家、つまり白い家と。人名にもありますよ。ブランシェ **Blanch(e)** とかビアンカ **Bianca** とかね。ちなみに **blank-** はもともと輝くという意味です。そこから「白い」→「色のない」を経て13世紀末に「空白の」という意味にもなりました。時間的な空白を言う「ブランク」がそうです。また、ブランケットは白い布切れの意味として1303年に誕生した単語です。

最後に、英語には「白い嘘」という表現があります。この **a white lie** とは「罪のない嘘」を指し、では「真っ赤な嘘」はレッドかということではなく **a down-right lie** で、面白くも何ともなくなってしまうですね。